

被災地の支援者として出来ること

高橋 有香里（宮城県）

震災から一年半が過ぎた。

去年は桜の花を見ても、花火を見ても涙がこぼれてきて仕方なかったが、今年は素直に美しさに感動できる自分を感じ、少しずつ落ち着きを取り戻しつつあることを実感する。

とはいえ、やはり私たちは被災地に住み、多くの大切な人や物を失った。その現実が変わらないし、そのことはあまりに大きい。震災直後から支援者として「何が出来るか」考え続けてずっと走ってきたけれど、誰かのためというよりも自分のために、悲しみの中に立ち止まらないために走ってきたように思う。

七夕飾りを作っていると、「七夕まつり」に来てくれた親子のことを思い出し、砂場を見ては、散歩の途中でベビーカーを押しながら立ち寄ってお喋りしていた母のことを思い出す。もう会えない子どもたちや母親たちの笑顔が浮かんでくと、自分自身がどのようにこの現実を受け止めれば良いのかと路頭に迷う。だから不意に思い出さないようにこの一年半を過ごしてきた。思い出す時は受け止めてくれる誰かの前で、泣いても良いと自分が決めた時間だけにした。受け止めてくれる仲間や友人がいたから私には泣く場所があった。

支援者としての私は、地域の人たちに同様に安心して悲しみを出せる場を作ってこられただろうか。自分が傷つくことを恐れ、悲しみの中にいる人に積極的にかわることにしり込みしてきたのではないか。震災後の支援を振り返り、仲間と共に反省ばかりが頭をよぎる。

しかし、走るペースをスローダウン出来た自分が改めて今、出来る支援を考えている。震災以前のように親たちの話に耳を傾け、居心地の良い空間を作る努力をすること、当たり前のことだがその当たり前前がとても難しく感じた日々だった。まだまだ被災地はすべてが当たり前になる日は遠いと思う。でも自分に出来る当たり前を繰り返すことで、日常をとり戻そうとすることが今の私の「生きる」だと思ふ。

